

第 2 回検討会における主な指摘事項（議事概要）について

検討会での主な指摘事項

事務局の対応（案）

1. コンセプト・目指すべき姿について

- 「異分野」という言葉が重要。多角的なアプローチにより、様々なアイデアが創出される。
- 「強い農業」、「国際競争力」というキーワードをぜひ入れたい。オランダのように積極的な輸出ができる強い農業を目指してはどうか。
- アジアは我が国の食品産業に何を期待しているのか、より明確化する必要。
- 本質は、農業の根本的な構造改革。農業が次時代の成長産業となるため、人材育成や生産性向上、コスト削減等に ICT やロボティクス等を活用する必要性を現場で強く感じる。
- 様々なマーケットに対応する「多付加価値づくり」という観点も重要。
(価値の転換をもたらすような) 新しい何かを想起させるメッセージが欲しい。
- 他分野の知恵を借りるだけでなく、農林水産業界が持つ知恵を公開して外部の人達を刺激し、自ら問題設定するところから始め、自分達の技術と融合するアイデア形成の場をつくることが重要。
- 今後 10 年で直面するであろう農林水産・食品産業に対する変化を想定した問題を議論することが必要。
- 「美味しい」は食品産業において非常に大きなキーワード。
- 若い「知」、ベンチャー的な新しい発想をどう取り込んでいくのか。最近では個人の尖った知恵がモデルを大きく変えている。

→御指摘を踏まえて、キーワードの追加等、第 2 回検討会資料 2-1 を更新
(資料 1-2 参照)

2. 研究プラットフォームのあり方について

(1) 求められる機能

- 「人材育成機能」が必要。ベンチャー企業や新しい人材を育成し、若い人達を集められるかが重要。
- 商品化、市場化に向けた実証機能があってもよいのではないか（例：オランダのワーヘニンゲンの「未来レストラン」）。
- 人材育成を促進する機能が必要。人を育てられる人を育てることが重要。
- 「集積」はストック量だけではなく、むしろフローの量、いろいろな知が交流する量が重要ではないか。
- マーケット創出を実際に担う企業やプレイヤーの位置付けをきちんとデザインしておくことが必要。
- オランダと比べて国土の広い日本では、ハブ的な要素だけでは、地方間の競争が生じてしまう恐れ。地域ごとの特性や強みなどを打ち出したやり方がよいのではないか。
- 名称を「研究開発プラットフォーム」にした方がよいのではないか。農林水産・食品に関するプロジェクト研究のための場であり、知的関心を至上とする (Curiosity-Oriented) 基礎研究の場ではないということを明確にしてはどうか。

→御指摘を踏まえて、機能の追加等、第 2 回検討会資料 2-1 を更新
(資料 1-2 参照)

検討会での主な指摘事項	事務局の対応（案）
<p>（２）運営・管理体制</p> <p>【ステークホルダー】</p> <p>○単に場を提供して外の知が入ってくるだけでなく、<u>主導権をとりながら場としての発展を戦略的によく考える必要がある。</u></p> <p>【コーディネート人材】</p> <p>○コーディネート人材には、<u>主体として責任を負って核となり進めるプロデューサー的なものと、それを支援するファシリテーター的な２つの役割がある。</u> それらを分けて整理する必要がある。</p> <p>○<u>プロジェクトの立ち上げから最後までを責任をもって見る人材がいないとシステムができて進まない。</u> サポーターとチームを組む体制をきちんとつくる必要がある。</p> <p>○1つのテーマに対して複数の組織が立候補した場合の<u>優先順位をどうつけるか。</u> 選出方法も管理システムとして検討が必要。</p> <p>○今回の取組は全く新しい試みであり、<u>これに必要な人材の創出の検討をすべき。</u> 研究者と企業人、異分野同士の組み合わせなど新しいチーム体制に加え我々もアドバイスしながら人材も育てていく必要がある。</p> <p>○日本社会は異能の突出した人が出てきた時、うまく突破できる人材として育てる社会環境がない。</p> <p>○第一線で活躍している経営者や業界のトップなどがコーディネート人材として有力。<u>このような人達に仕組みとしてのプラットフォームに関わってもらえれば、スピード感を持って事業化できるのではないか。</u></p> <p>【技術の集積と活用】</p> <p>○リスクコミュニケーションについて、<u>今後は研究を始める前から情報を開示し、途中経過も丁寧に報告しながら戦略をつくりつつ、全体を動かすことがまさしく「知」の集積で本当の意味の産官学連携になる。</u></p> <p>○<u>もっと公正に技術や知財を守らない限り、最先端の人達、トップの技術は集まらない。</u></p> <p>○<u>民間企業のメリットやベネフィットを整理しておかないといけない。</u> 知財の調整の問題など、最初から上手に建て付けておくことが重要。</p> <p>○このような研究開発で一番ネックになるのは機密管理、知財管理。<u>企業のメリットの明確化と情報の管理が一番の重要な視点。</u></p> <p>○知財については、<u>知財本部の新しい指針等を参考にすべき。</u> 農水省はあまり経験がないので新しい課題になる。</p> <p>○シリコンバレーのコピーを日本に作ることはやめて、むしろそこに人材を送り込み、育成し、新しい産業を創り出す取組を進めている。府省連携して新しい分野としてやっていく必要がある。</p> <p>【資金】</p> <p>○「知」の集積の場で行う提案へのファンディングするためのメカニズムであれば、アメリカのGHIT（熱帯病に対する医薬品を開発するファンド）が一つのモデルになり得る。ガバナンスがしっかりして選考がフェアに行われるかなどが非常に重要。</p>	<p>→御指摘を踏まえて、第2回検討会資料2-1を更新（資料1-2参照）</p> <p>→コーディネート人材等具体的な内容を議論（資料2-2参照）</p> <p>→知財の対応など、他省庁の対応を整理し、第4回検討会以降で報告予定</p>

検討会での主な指摘事項	事務局の対応（案）
○製鉄業が衰退したオハイオ州のヤングスタウンのマッチング・ファンドの仕組みは参考となる。	

3. 研究テーマの考え方について

<p>(1) 基本的考え方</p> <p>○生産から、流通、食事、廃棄までそれぞれの段階を整理してイノベーションを考える方が分かりやすい。</p> <p>○バリューチェーンの考え方での整理は非常に重要。</p> <p>○何をやるか (what)、どうやってやるか (how)、よいものをきちんとつくるあるいは安く、楽に作るという切り口は分けた方がよい。</p> <p>○企業にとっては3年というとはほとんど既に研究計画があってパートナーが決まっている感覚。もう少し腰を落ちつけて、芽の段階から企業が入り込めるようなプラットフォームにして欲しい。</p> <p>○米は食料として優秀であり、今後市場として広がる可能性がある。日本は米の先進的な技術がある。それを対外的に発信することが重要。</p> <p>○EUのFPプログラムでは、2020年までの4ヶ年の研究期間を設定している。4年間で全て終了とはならず、そこからの派生プロジェクトや次のプロジェクトが必ず付いてくる。継続的な開発や取組が重要。</p> <p>○「輸出産業化」が重要。フードバリューチェーンそのものをどうやって海外に持っていくのかを、オールジャパンの力で、国がデザインして欲しい。アジア中心にアフリカなども含め、次の時代を切り拓いていく大きなテーマになる。輸出産業化とともに食産業の輸出、グローバル展開がある。</p> <p>○サプライチェーンやバリューチェーンという切り口は重要。発言にあった9ステージのモデルも3つくらいのフェーズに分けて、研究テーマを設定すると、異分野の企業も自身の技術シーズを当て込みやすい。</p> <p>○農業の競争力強化等様々な取組を実施し、バリューチェーンを構築し新たなモデルをつくらうとしている。マーケットインが重要だが、今まではニーズに合わせる発想が徹底していなかった。</p>	<p>→御指摘を踏まえて、第2回検討会資料2-1を更新 (資料1-2参照)</p>
<p>(2) 研究テーマの検討の視点</p> <p>○世界のためという問題設定は非常によい。食品産業はアメリカとヨーロッパという2つの大きな核があるが、アジアにおいて「米の文化圏」で1つの核をつくってもよいのではないか。</p> <p>○6次産業は「生産」、「加工」、「流通」と言われるが、「調達」、「調理」、「食事」、「片づけ」、「残渣処理」、「リサイクル」を含めた「9次連関モデル」まで考慮することが必要。</p> <p>○日本の農業において、担い手の減少、不足は深刻な問題であり、これに対応していくことが必要。</p> <p>○栄養バランスをどう(消費者へ)伝えるか、あるいは健康によいというエビデンスをとるかは国全体の問題。</p> <p>○ゲノム編集、組み替えは日本の市場で受け入れられ難いだろう。但し、グローバル的視点では避けて通れず、市場化は別として研究開発のテーマとしては極めて重要。</p>	<p>→御指摘を踏まえて、第2回検討会資料2-1を更新 (資料1-2参照)</p> <p>→研究テーマの具体化に向けた考え方を整理 (資料2-3参照)</p> <p>→個別のテーマの具体的な内容については、第4回検討会以降で検討予定</p>

検討会での主な指摘事項	事務局の対応（案）
<ul style="list-style-type: none"> ○重要なのは、ゲノム編集が安全かというサイエンスが実は足りないこと。<u>基本データがなく、安全・安心の研究としてやるべきである。</u> ○日本は世界最大の組み換え食品（GMO）の輸入国。イノベーションの成果とリスクをコミュニケーションするスキルを持たないといけない。<u>サイエンスだけでなく、社会科学やコミュニケーションも研究するという場になることも期待。</u> ○レギュラトリーサイエンスという社会的研究も必要になってくる。<u>「知」の集積でやるのか、別のところでやっているからここではやらないのかなど考えていく必要がある。</u> ○ゲノム編集は、<u>社会的コンセンサスがまだなく、技術的には非常に魅力があるが民間企業はなかなかそこまで踏み込めない。</u> ○日本の場合、<u>震災後の被災者のメンタルケアをどういう形で、食品成分によってできるかなども重要なテーマになるのではないか。</u> ○「美味しい」は一方で<u>肥満化の進展などの問題にも繋がっている。高齢化に応じた最適な食生活など、人をベースにした栄養学は1つのイノベーションの方向だと思う。</u> 	

4. その他

<ul style="list-style-type: none"> ○クラスター政策の反省点は研究がマーケットまでつながらなかったこと。はじめから<u>出口をきちんと考える取組が重要。</u> 	
--	--

以上